

聖公会の祈祷書には、はじめに教会暦というこよみが書かれています。1年間のそれぞれの日に信仰的な意味づけをして、1年を通してそれぞれの信仰を高めてゆこう、ということです。そしてその最初に

「教会暦は祝日と齋日とから成っている。」と書かれています。

「祝日」というのはみなさんよくわかるでしょう。お祝い日です。クリスマスやイースターは、その中でも代表的なものです。広辞苑では「めでたい日。いわいの日。特に国で定めた祝いの日。」と書かれています。教会の場合は、国の祝日とは関係ないでしょうけど。

一方「齋日」はどうでしょう。聞いただけは「祭りの日」の祭日を思ってしまうますが、現在では、お祭りの日という「祭日」は、皇室行事や、神道で使うのがほとんどで、第2次世界大戦ころまでは、国としても「祭日」と呼んでいたようですが、現在は「祝日」ということになりました。

話をもとにもどして「齋日」です。

インターネットで調べてみましたが、  
神道では、齋日（神道）・いみび。神道で霊祭を行う日。→物忌み（ものいみ）。

キリスト教では、齋日（キリスト教）・キリスト教で、祭に自らの心身を備える事を定められている日。「さいじつ」との読み方が多くの教派でなされているが、正教会（日本正教会）では「ものいみび」と読まれる。→齋（ものいみ）。

「物忌み」というのは、ある期間中、ある種の日常的な行為をひかえ穢れを避けること。齋戒に同じ。

それでは、聖公会の祈祷書ではどうなっているか。祈祷書の8ページを開くと「齋日」については、1断食日 2齋日 というふうに、ふたつあります。大齋節の始まる「大齋始日」と、大齋節の最後から二日目、イエス様が十字架にかかれた日である「聖金曜日」いわゆる受苦日が断食日。イースターやクリスマスのお祝い期間以外の毎週金曜日は、大切な祝日と重ならない金曜日は、「齋日」ということになっています。

]

普段は、毎週金曜日だけが「齋日」なのですが、毎年この季節には、今年の場合は、2月14日から3月30日まで「齋日」が続くので、その季節を「大齋節」と私たち聖公会は呼んでいます。カトリックや他のプロテスタントの多くが「四旬節」と言っているのは、この「齋日」が40日続くからです。

欧米では、この齋日には、肉ではなく魚を食べて質素に過す、ということになり、それが40日も続くので、その前にお肉をたっぷり食べよう、ということで、カーニバルが行われるのは、大齋節のはじめころに話しました。それで、今日は断食日について話したいと思います。

今日は、聖金曜日。イエス様が十字架に付けられた日なので、私たちは断食日としています。これは大齋始日の断食日と合わせて、2日あります。イエス様の荒野の40日の修業を思い出す意味もあります。

それでは、ユダヤ教ではどうか。ユダヤ教の暦を見ると、1年に6日ぐらい、断食日があります。悪かったことを反省したり、何かの願い事があり、熱心に祈るために断食したりします。

しかし、今日考えていただきたいのは、イスラムの断食です。

イスラムでは、断食月というのがあります。1か月の断食です。今年の場合は、3月10日（日）に始まり、4月8日（月）に終わります。

こんな長い期間断食をするのか、とっていますが、でも、皆さんご存知かもしれません。ラマダーンの時は、昼間は断食しますが、日没になるとみんな腹いっぱい食べるのです。

私はそれを聞いた時、「なーんだ。そんな抜け道があるのか。」とがっかりしたのですが、「一神教と国家」という本を読んでもみると、イスラムの断食の意味がわかりました。

この習慣は、施しの文化の一端だそうです。約1か月間、日の出から日没まで飲食禁止で、日が暮れてから解禁になるのですが、この時期は市中のモスクやレストランで食事がタダで振る舞われます。教会と違ってモスクはメンバーシップがありませんので、誰でも入れて、お金がなくても食べられます。日が落ちると人がいっせいに集まってくる。「ドゥユーフツラフマーン」と言って、「アッラーの客」という意味。

お肉とかもあって、わりと贅沢。何の気兼ねもいらないので、貧乏な人でも、ラマダーンの時は、腹いっぱい食べられる。1か月食べ放題。かなりよくできた福祉制度と説明していました。

イスラムは、個人よりも共同体での助け合い、ということを大切にするようです。それは過酷な環境の中で生き延びるには、助け合いが必要だからです。

日本のような、そしてイスラエルも現在ではそうですが、農耕民族は、一か所に定住するので、まともに働いていたら、ある人だけが豊かとか貧しいということはないでしょうが、砂漠に住み、狩猟などを中心にしている人々は、ある人が獲物を獲ったけど、ある人は獲物がない、というのはしばしば起こることです。その時、助け合うんですね。

面白い話をしましょう。宮崎へ来る前、私はフィリピンへワークキャンプに出かけました。村の人たちの飲む水では、私たち日本人はお腹をこわすから、ということで、ミネラルウォーターを用意してもらって、それを携帯して作業するんですね。でも、いつもそれを持っておくわけにはいきません。ほったらかしにすると、みんな同じペットボトルだから、見分けがつかなくなる。それで、ある青年は自分の名前を書いていた。私も、書けばよかったのですが、それをしないで、見失ったりすることがありました。自分の飲み水に名前を書く、というのは、ものを大切にする、いいことですね。

ところが、作家の村上龍という人が、エッセイに書いているらしいのですが、彼はパリ・ダカールラリーの取材で、テレビ局のチームと一緒にアフリカに行った。砂漠を旅している時に、ミネラルウォーターのペットボトルにテレビ局のチームの誰かが自分の名前を書いて置いておいた。そしたら、現地人で一緒に働くチームの人が「こんなやつと一緒に働けない。」とすごく怒った。

砂漠では水は貴重なので、独り占めしてはいけない。回し飲みが常識。これは食べ物も同じで、だから、食事も分け合いなさい、ということになるそうです。

それがイスラムのラマダーン、断食の精神なんですね。

昼間水も飲まない生活をするのは、飢えた人の気持ちを考えて、その苦しみを味わい、夜には人々と食事を共にする、たいへん意義ある断食のように思えました。

コロナが蔓延した私たちは、他の人と飲み水や食べ物を一緒に刷るのは良くない、ということになりますが、お互いが助け合うことのためには、感染症さえなければ、とてもいい習慣のはずです。

食べ物や飲み物はべつでも、自分が二つ持ち、目の前の人は何も持っていないなら、ひとつはその人に分けてあげて、共に生きている、助け合うのが人間の在り方だと、知る必要があります。

これは、やはり私たちも反省する必要があるのではないのでしょうか？断食と言えば、ただイエス様の苦しみに倣うことと考えると、苦しむこと自体が目的になってしまっている。

しかし、それじゃだめだ、ということのパウロは教えています。

有名な、コリントの信徒への手紙一 13章のところです。

『13:3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

13:4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。』

私たちが、断食をするのも、やはり愛を感じることに、人を助ける者になることが、大切なように思います。今日は、食事は用意していませんし、明後日も今年は祝会のかいしょくはありません。しかし、お茶を飲みながら、断食の意味を少し考える時を持ちましょう。